

研究交流計画の目標・概要

【研究交流目標】 交流期間（最長3年間）を通じての目標を記入してください。実施計画の基本となります。（自立的で継続的な国際研究交流拠点の構築と次世代の中核を担う若手研究者の育成の観点からご記入ください。）

本計画の目標は、国家の社会保障が未成熟なアジア途上国の強みであるアジア型社会関係資本を活用し、新興感染症のような現代グローバル社会における未知の危機にあらかじめ備え迅速に対応できる能力、すなわち能動的レジリエンスを醸成することを通じて、脆弱な人びとのエンパワメントを行うことである。

気候変動やグローバル化により、これまで経験したことのないような災害が世界中を襲うようになってきている。途上国のマイノリティや移民など周縁部で脆弱な立場にいる人びとは、こうした未知の危機の打撃をとりわけ受けやすい。彼ら／彼女らをエンパワメントすることは持続可能な開発目標(SDGs)の達成のためにも喫緊の課題である。本計画が対象とする東南・東アジア途上国の特徴は国家の危機対応能力が弱いことだが、家族・親族、地域コミュニティ、NGO/NPO などからの支援、すなわち社会関係資本が危機対応に果たす役割はその分大きい。こうした危機からの復元力・回復力を意味するレジリエンスについて、それを受動的・事後的なものではなく、危機を見越して事前に備える能動的(proactive)なものとして捉える必要性が近年指摘され始めている。アジア途上国で能動的レジリエンスの醸成に社会関係資本が果たす役割を体系的に比較検討した実証研究はまだ存在しないため、本計画ではその解明を学術的・実践的目標とする。

この目標を達成するための自立的で継続的な国際研究交流拠点として、専修大学ソーシャル・ウェルビーイング研究センターをハブとして10年以上の活動実績を持つアジア6ヶ国の国際共同研究ネットワークを、さらに発展させる。具体的には、日本、タイ(チュラーロンコーン大学)、インドネシア(インドネシア大学)、フィリピン(アテネオ・デ・マニラ大学)、ベトナム(ベトナム社会科学院)、モンゴル(独立モンゴル研究所)である。

若手研究者の育成のための体系的教育プログラムにも力を入れる。日本、インドネシア、モンゴルで毎年1回開催する若手育成ワークショップで、各国から参加する大学院生やポスドク等の若手研究者にホスト国の研究者がフィールドワークやセミナーなどのスタディー・プログラムを提供するとともに、若手自身がテーマを決める若手共同研究の遂行を支援し、研究能力向上とネットワーク形成を図る。

【研究交流計画の概要】 我が国と交流相手国の拠点同士の協力関係に基づく多国間交流として、どのよう
に①共同研究、②セミナー、③研究者交流を効果的に組み合わせる実施するか、研究交流計画の概要を記入
してください。

①共同研究: 能動的レジリエンスの醸成にアジア型社会関係資本が果たす役割を分析するために、タイ、インドネシア、フィリピン、ベトナム、モンゴルの途上国5ヶ国で都市部と村落部からそれぞれ1ヶ所ずつ選んだ地域コミュニティを対象に、新型コロナ感染症への危機対応に焦点を合わせたフォトボイス調査とキーパーソンに対するインタビュー調査を実施する。フォトボイス調査とは対象地域の協力者に定期的に撮影してもらったストーリー付き写真を当事者と研究者とで共有・議論するもので、他の方法では拾いにくい脆弱な人びとの声を集めるのに適している上に、当事者が課題に気づき内発的に解決策を模索するエンパワメントの効果もあわせもつ。さらに、感染症の流行下でも非接触で調査が遂行できる利点も見逃せない。

②セミナー: 共同研究の成果を研究者、当事者(調査協力者)、一般市民、学生などに還元するための公開シンポジウムを、毎年1回日本で開催する。対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド形式で実施することで、世界中の聴衆が簡単に参加できるコロナ時代の研究発信の新たなスタンダードを構築する。

③研究者交流: 次世代を担う若手研究者を育成するための体系的教育プログラムとして、若手育成ワークショップを毎年1回、日本、インドネシア、モンゴルで開催する。スタディー・プログラムの狙いは、アジアの文化的・社会的多様性を体得した上で自国と他のアジア諸国の社会を的確に分析できる人材を育てることである。若手共同研究の狙いは、ネットワーク構築を支援し国際共著論文等の成果につなげることである。

【実施体制概念図】 本事業による経費支給期間（最長3年間）終了時までに構築する国際研究協力ネットワークの概念図を描いてください。

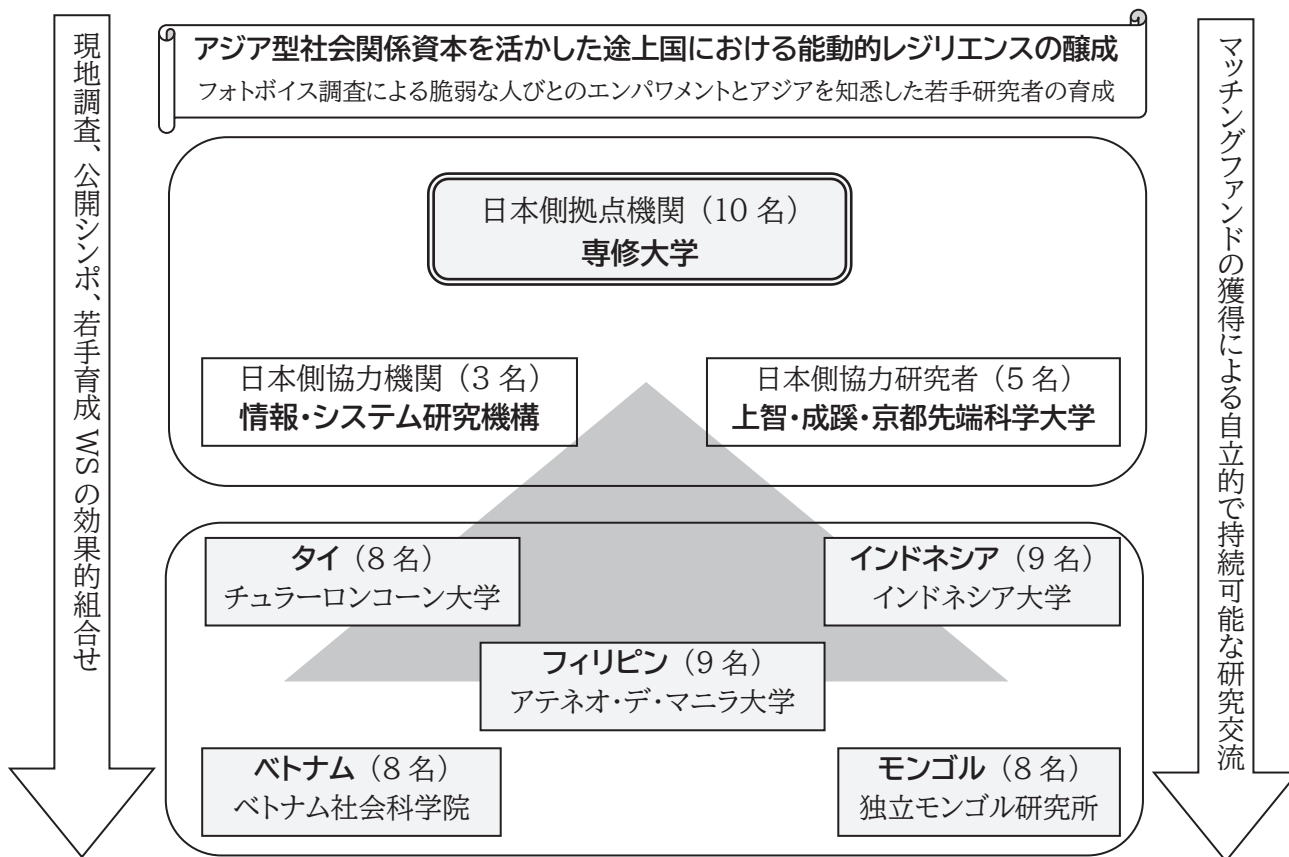
- 背景**
- 新興感染症の流行など現代グローバル社会における未経験の／未知の危機
 - アジア途上国における国家による危機対応の機能不全とアジア型社会関係資本の有効性
 - 2009年以來構築してきたアジア6ヶ国の国際共同ネットワークの実績と信頼関係



- 目標**
- アジア型社会関係資本を活用した能動的レジリエンスの醸成支援
 - ウェルビーイング研究で実績を挙げた自立的で継続的な国際研究交流拠点の新展開
 - 体系的教育プログラムによる日本と途上国の若手研究者の育成とネットワーク構築

方法

年度	共同研究	セミナー	研究者交流
	フォトボイス調査&キーパーソンインタビュー	公開シンポ	若手育成合宿
2022	インドネシア、ベトナム	日本	日本
2023	タイ、モンゴル	日本	インドネシア
2024	フィリピン	日本	モンゴル



- 成果**
- 社会関係資本を活用した能動的レジリエンスによる危機対応のアジア途上国モデル
 - ハイブリッドセミナーや英文ジャーナルによる世界中の研究者、当事者へのアウトリーチ
 - 自国や他のアジア諸国の社会・文化を深く理解した若手研究者によるアジア発の研究発信



- 将来**
- 未知の危機に遭遇した際の能動的レジリエンスの頑健性のフォローアップ調査
 - 他のアジア途上国(カンボジア、ラオス、ミャンマー)への国際研究交流拠点の拡大